



～夏休み旅行エピソード受賞作品 10 作品～

高校三年の夏、私は、私史上最も切羽詰まっていた。志望大の合格が絶望的だったからだ。

朝は早起きして過去問を解き、移動時間は英語を聴き、昼間は予備校で講義を受け、夜に予備校から帰った後も、眠い目をこすりながら机に向かう。そんな頑張りとは裏腹に、模試判定が私に贈るアルファベットは、大体DかEだった。

ある日、予備校に向かう電車に乗りこむと、忘れ物に気が付いた。リスニング用のウォークマンがない。電車に乗る三十分を思うと自然とため息が漏れた。仕方なくテキストだけを開くと、車内にセミの鳴き声が響いた。窓の隙間から入り込んだらしい。そのけたたましさにギョツとして顔を上げると、車窓から様々な色が目に飛び込んできた。背の高い向日葵、キラキラとまぶしい新緑、絵の具をいっぱい広げたような青空、思わず手を伸ばしたくなるような白い雲。「世界はこんなに綺麗だったんだな。」大げさでなく、そう思った。いつも耳を遮断し、テキストに目をやっていたから全く気付かなかった。ウォークマンを忘れた後悔の念は、いつの間にか消えていた。私は勉強の手を止め、窓から身を乗り出すようにして、流れていく夏をずっと見つめていた。

その日以降、予備校へ向かう行きと帰りの電車で勉強をするのをやめた。ただただ窓の外の景色を眺めた。帰りの時間によっては、夕焼けが「お疲れ様」とでも言うように、すっぽりと優しく包み込んでくれた。私は、詰め込みをやめて肩の力が抜けたのか、段々だが成績も上がっていった。

私にとって、最寄り駅と予備校の間の三十分間は、旅だった。観光スポットでもなければ、見返す写真も一枚もないが、私の心を溶かして解き放ってくれた、素晴らしい夏の旅だった。十年以上経つが、今も夏の電車に乗れば思い出す、大切な思い出だ。

義父は、本当に旅が好きで毎月義母と旅行に行っていた。

私が嫁いでも、毎年いろいろな所に連れて行ってくれた。子供が生まれてからも、毎年必ず夏休みと冬休み旅行に連れて行ってくれた。子供が小学生になると、絵日記に書くため、ポケモンジェットに乗りたい！といえば飛行機の予約を入れてくれたり、とにかく、孫の為全国いろいろ連れて行ってくれた。

60歳を過ぎてから、旅行会社を始められる資格を取りとにかく努力の人だった。毎週、東京に行きとにかくアクティブな人だったが、今は難病と戦っている。大好きな旅行にも行けない日々…

元気になって、義父の笑顔と全国の旅の話をもた聞きたい。頑張れ！お義父さん！

また、みんなで笑って旅に行こう！

私が京都祇園祭へ一人旅したのは、かれこれ45年以上前のことです。

当時京都駅近くの二段ベッド2台4人の相部屋の宿泊所を利用していた格安旅でした。同室になったのはニコル(20歳位)とママのフランス人母娘とその知人の日本人女性。私は身軽な一人旅で伏見稻荷まで足を延ばすなど旅を満喫していました。

ところが翌日、フランス人母娘を案内していた女性が急用のため東京へ帰ることになってしまい、その女性から母娘と一緒に市内観光してもらえないかとお願いされ、英語の話せるニコルとフランス語のみのママと中1レベルの単語程度しかわからない私の3人で市内観光に出かけることになったのです。

市内をバスに乗り八坂神社や清水寺などを巡り、祇園祭の山鉾巡行では美しい刺繍や舶来の織物などで装飾された豪華絢爛な山鉾に歓声をあげ、写真を撮り、途中で「ひやしあめ」を飲み、レストランで食事し、言葉はそれほど通じなくても身振り手振りを交えてコミュニケーションをとりながらの一日でした。

これは私にとって初めての外国の方との交流でした。フランス人はHが発音できないことを知り、夕食はチョッピリしか食べないこと、夜良く眠れるからとそれまで飲んだことのない飲み物を勧められ(今思うとハーブティー)、親子でブラジャーを取り替えっこして使ったりとびっくりすることも。ニコルはTシャツにジーンズ、ママは紺白のボーダーニットと紺のパンツにパールのロングネックレスと、その着こなしはさすがフランス人と実感したものです。

旅行から帰った私は、ああもつと英語を勉強すれば良かったと自分の語学力を後悔しました。その後英会話スクールを探し通うようになりました。そして同じスクールに通っていた夫と知り合い、今年結婚42年になります。それにしても、若い頃の自分はなんて度胸があったのだらうと驚くばかりです。きっと、若いからこそチャレンジ出来たのだとつくづく今さらながら思います。ただし、英語力のほうは相変わらずですが。

私は5人家族の長女です。母が栃木県出身ということもあり、夏休みのお盆の時期には毎年那須へ家族旅行に行っていました。

私は29歳のとき、旦那さんと結婚し、それからは那須旅行へは旦那さんといくようになりました。結婚して初めての8月16日、旦那さんと那須旅行を楽しんでいるときのことで。兄弟にお土産を買ってあげようと思い、弟に連絡をしました。すると、弟からの返信はこうでした。

「え？俺たちも今、那須にいるんだけど・・・！！」

私と旦那さん、母はスーパー業界で働いているため、休みはシフト制です。三人の休みがたまたまあって、そのときその時間に、たまたま那須に家族旅行に行っていた、なんて、本当に偶然です。

でも、それはただの偶然だったのでしょうか・・・。

実は私の父はその年の5月に他界していました。64歳でした。仕事人間だったけど、私や弟たちのことは可愛がってくれていた父。もしかしたら、父がみんなの休みをあわせてくれて、もしかしたら父も一緒に家族旅行ができていたのかなと、思っています。

「ただの偶然」ではなく、「父からの必然」だったのかも。もう二度とお話できませんが、父に感謝しています。

私がまだ小学3年生だった頃、2歳上の姉と2人で香川県から祖父母の住む大分県に電車と新幹線乗り継いで行った思い出を今でも強く覚えています。

乗り継ぎを間違えないように、何度も母に教えてもらったり、子供ながらに脳内シミュレーションを繰り返しました。『分からなかったら駅員さんに聞くといいよ』と言われていたものの、知らない人に話しかける勇気が当時はなかったため、旅行の楽しみと不安と緊張と、色々な感情が混じっていました。

実際のところ、駅員さんに聞くこともなく、大きなトラブルもなく無事に祖父母の待つ駅に着くことが出来ました。大人になった今でも思い出すこの冒険が、自信になり私を強くしてくれたような気がします。子供を信じて送り出してくれた母に感謝です。

そしてこの夏、小学1年生の息子が一人で飛行機で祖父母の家へ行きます。

乗り換えがあるわけでもなく、搭乗口まで送り、到着ロビーで祖父母が待っているのが親としては心配事はありません。しかし息子にとってその間の約1時間半は大冒険になるのでしょう。毎日毎日、楽しみと不安を伝えてくれます。

この経験が、彼の自信となり、少し成長した姿が見れることをこの夏の楽しみにしたいと思います。

電車（でんでん）と踏切（カンカン）が大好きな息子は1歳7ヶ月。

お散歩をするときは必ずカンカンのところに行き、でんでんを見るまで帰りません！ やっと帰る方向に歩き出したと思っても、カンカンカンと聞こえたらトコトコトコ〜と逆戻り。そんな息子とこの夏、電車に乗って日帰り旅行に出かけました！

いつもはカンカンに遮られビュンと通り過ぎて行くでんでんが目の前に止まり、ドアが開いた瞬間、目をまん丸にして両手をパンパンと大興奮。元気いっぱい大きな一歩を踏み出すかと思いきや…脚を踏ん張ってその場に留まり、どんなに誘ってもでんでんに乗ろうとはしません。そうこうしているうちに、ドアが閉まりでんでんは出発。息子は笑顔で手を振って見送りました。手が届くほどの距離ででんでんを見た息子はキャッキヤとはしゃぎ、でんでんを迎えては見送りを繰り返し1時間ほどすると、満足したのか帰る気満々。夫と私は日帰り旅行を断念。朝から張り切ってお弁当を作った私はとても残念で。。

息子にとってでんでんは乗るものではなく見るものだったようで、電車に乗って日帰り旅行は電車に乗れず静かに幕を閉じました。家に帰って嬉しそうにお弁当を食べる息子。秋にまた再チャレンジを誓う私。それを見てクスクス笑う夫。その日もまた幸せな1日を過ごしました。

当時3歳と2歳の男の子を連れて、熊本へ帰省。「早く、くまモンに会いに行こうよ！」と、長男にせがまれ、くまモンの出勤時間に合わせてくまモンスクエアに行きました。

地元の子供たちに大人気で、中には入れず。外で出待ちしながら、主人が長男を肩車して、くまモン体操を見せていると、後半、周りのお母さんたちがクスクス笑い出しました。自分への視線を感じた主人は、近くの人に「もしかして、寝てます？」と、聞くと、「はい。ヨダレ垂れてますよ。」と言われ、人ゴミから出て来ました。

肝心の長男は、そのまま起きることができず。全然、興味なさそうだった次男は、ちゃっかりくまモンと握手して、ハグまで……。七夕の短冊にまで書いて願った『くまモンと対面』は叶わず、残念な長男の夏休みの思い出です。余談ですが、翌年は居眠りせずに、くまモン体操をノリノリで踊り、クイズに答えて、くまモンにプレゼントをもらい、頭を撫でてもらいました！

大学 1 年生の夏休み。以前からとても行きたかった初めてのアメリカホームステイ旅行。夏休みの初日に出発して最終日に帰国する、58 日間の旅でした。

アメリカの一般家庭に入り、生活は全て英語。面白いホストファザー、今時の明るい 2 人のホストブラザー、そして優しく理解あるホストマザー。初日はとても緊張しましたが、徐々に生活と英語にも慣れてきて、冗談も言い合える仲になりました。本場のフリーマーケット、ハロウィンなどの疑似体験、アンバーズデーパーティー、キャンピングカーでのキャンプ、クラフト制作、数々の日帰りツアー。

毎日が初めて尽くしで、本当に貴重な時間を過ごす事が出来ました。

家族に恵まれてとても親しくなり、帰国時には淋しさでホストマザーと号泣した程です。

アメリカは多民族国家で、独立心や個性を認める点が日本とは大きく異なると実感して、現在の私の基盤となっています。若い時に海外で過ごす事は「日本人とは、家族とは」と見つめ直す好機でもありました。お小遣いとアルバイトで旅費を貯めるのは大変でしたが、思い切って実行して本当に良かったです。

その後、旅行が趣味となり国内外何度も出かけましたが、ホームステイ旅行が今でも最高の思い出です。

コロナ禍ではありましたが、7 月終わりに家族で岡山県の倉敷市、瀬戸市、岡山市、犬島へ行きました。

特に犬島はたった 10 分でしたが、家族全員船に乗るのが初めてだったので大興奮！山に囲まれた所で生まれ育ってきただけに、海だけでも興奮するのに、船に乗って行くという事に子どもたちははしゃいでいました。浜辺では思い出にシーグラスや貝を拾ったり、浜に打ち上げられたクラゲを棒でつついたり…子どもだけでなく大人まで服を濡らして海を楽しみました。

ホテルでさっそく三男が犬島の事を宿題の日記に書くというので出来上がった日記を見てみたら、『太島、楽しかったー』と 100 マス位ある日記帳にはみ出さんばかりの大きな字。よっぽど楽しかったんだなあと思いながら夫婦で見た後、犬島ではなく太島となっている所は訂正しました。

数年前、遅い夏休みをとって、家族 4 人（私（ママ）・パパ・息子（当日、中 3）・娘（当時、小 6）で、ミニバンで強行スケジュール夜行 1 泊の USJ・大阪、京都の旅に出かけた時のエピソードです。

当日は、家で夕飯とお風呂を済ませ 22 時頃に群馬の自宅を出発しました。運転は夫婦で交代しながらという話で最初は私が運転して、いざ USJ へ！調子良く高速を飛ばして走っていたのですが、だんだんと睡魔と疲れでボーっとしてきたので、次の恵那峡サービスエリアでトイレ休憩する事にしました。

S A に車を停めて、後部座席で爆睡している 3 人に声を掛けましたが返事は無し！私は 1 人でトイレに行き、外の空気を吸ってリフレッシュ！早々に車に戻りました。寝ているパパを起こして運転を代わって貰うのもかわいそうかな～と思い、先を急ぎ、もうちょっと運転をガンバる事にしました。

恵那峡 S A を出発して 20～30 分経った頃でしょうか？真夜中 2 時過ぎに私の携帯が鳴りました。運転中なので、出ずに画面をチラ見すると、後ろで寝ているパパからの着信でした。当時、ズボンのお尻のポケットに携帯を入れていると、勝手にボタンが押されて誤発信される事が多々あったので、気にせずに運転を続けました。すると、**何度も何度もパパからの着信**、更に知らない番号からも次から次へと着信が入りました。ただならぬ予感が…高速で走行中でしたので、大きな声で後部座席のパパを起こそうと何度も叫びましたが返事無し！今度は息子を起こして『パパいる？』と聞くと、『いない！』との返事が……そうです。私は パパをサービスエリアに置き去りにしてしまっただけです。

その事に気付いてしまった私は、慌てて路肩に緊急停車！すぐにパパに電話しました。パパは第一声『大丈夫か？』と。どうやらパパの辞書には『置き去りにされた』は無かったようで、私たち母子 3 人が車ごと拉致されたと思って警察に捜索願いまで出していたのです。流石にびっくりでしたが、すぐに戻って迎えに行くと言うと、警察の安否確認が終わるまで動いてはいけない！との事で、次の養老のサービスエリアで、警察を待つ事に。

養老 S A に車を停めて警察の安否確認を待ってる間、改めてパパに電話すると、恵那峡 S A で誰か養老 S A まで乗せてくれる人を探し回って何人にも断られ、やっと乗せてくれるドライバーさんが見つかったとの事でした。待つ事 1 時間、警官に頭を下げて笑って許してもらい、旦那は 10 トントラックで 映画のワンシーンの様に登場！ 若き優しいドライバーさんにも御礼をし、やっとパパと合流『会えて良かった～』と笑って許してくれたパパ、笑っちゃうやら申し訳ないやら…

気がつけば、すっかり日が昇り、私たち家族は一路 USJ に向けて先を急いだのでした。今となっては USJ よりも記憶に残る旅の思い出となりました。

追記、もう少し連絡が遅ければ、地域一帯、誘拐事件として検問がしかれる事になっていた様で、ギリギリセーフだったそうです。